

集團意識に就て

茲で集團意識と云ふのは。各個の集團の中に共通に存するその集團固有の信仰及感情等の總計を指すものであつて、既に御承知の如く各集團は各それに特殊なる集團的信仰、集團的感情等を持つて居るものであります。例ば私共は日本國民として、英國民、米國民又は佛國民等といふ様な別の國民とは異た、私共固有の信仰を持ち、感情を持つて居るものであります。又社會には階級といふ集團があります。これに就ても同様であつて、一の階級に屬する者に共通な信仰、感情等は、他の階級のそれとは極めて異て居るものであります。若しもその間に特殊なる相違を、はつきり認めることが出来ない時には、そこに階級は存在せないと云つて好いのであります。つまり或集團に共通であつて、しかも、集團的起源を有つところの意識内容を指すものであります。集團生活の存するところには必ずこの集團意識の發現を見るものであつて、斯る集團意識が存する以上各集團には、その考へ方、その感じ方及其その行爲の仕方の一つの特有なる型(タイプ)が生れて來るのであります。つまり斯るタイプを造り上げる原動力となるべき特殊なる「力」が集團生活の產物として出て來るのであります。これがあればこ

そ、多數の人々の集合であるところの集團が見方に依つては、丁度一ケの人格者の様に、その思想、感情及活動が統一せられ、一致せられて見ゆるのであります。

斯様な意味の集團意識の研究を致しますに就て二ツの方法が考へられます。その一は認識論的又は論理學的的研究、その二は制度論的研究であります。

茲では、この第一に屬すべき認識論的研究即集團認識といふことについて、極く簡単に御話いたしたいと思います。

集團意識の表象として最も著しく私共の眼に映ずるものは傳統的に傳はるところの、宗教的經典及儀式、俗習法規、格言、神活、傳説等であります。従て、これ等集團意識の表象事實を解剖、比較することに依て集團認識の研究をなすことが出来ます。前に説いた様に、集團意識は集團生活の産物である。従て集團生活の變遷は惹いて集團意識の變化を伴ひ、その認識活動の進化を惹起すべきは明かであります。集團認識の如何なるものなるやを確め、その活動の形態及進化の狀況を知るには、先づ、未開社會の生活狀況を調べ、斯る社會に於ける集團認識の活動を研究し、その特徴を知り、惹いて複雑なる文明社會の狀況と比較考察をなすことが、斯る研究にとつて、最も適切なる方法と云ふべきであります。何となれば、未開社會はその集團生活が極めて幼稚、簡單であつて、その生活關係を容易に分析し、その心的活動の内容も最も完全に近く解剖し得るからであります。唯だこれについて、最も困難であつて常に誤解し易い點は、未開人の心理は私共の心理と全然同一ではない。それ故、

私共の考を以て直ちに未開人の考を想像してはならない、といふ點であります。この點については十分に注意して私共の心理は全然別物として、全く客觀的の立場から「未開人の考」を研究する様に努めなくてはなりません。

未開社會の研究は從來各國の學者に依つて逐げられて多數の材料が集められて居ります。それについて見ますると、私共の眼には誠に珍しい、不思議に思はれることが數多くあります

今或一つの繪を行つて中部アフリカの一土人に、それが何を表して居るかを尋ねて見る、初め尋ねられた時には彼は、それが戯れに書かれたものであつて、少しも意味を有つてないと答へる。然るに此同じ繪が經典の中に書かれてあるか又は特殊の場所に置かれると非常に特別な意味を持つ様になる、同じ土人に同じ繪を尋ねて見ても、その置いてある場所の如何に依て、時には全く無意味のものとなり、時には極めて重要な意味を表示するものとなる。そして斯る重要な意味を有つ様になる場所は常に或神聖な場所であつて、多くの場合婦人はそこへ近づくことを禁せられて居る。

私共にとつて或繪の形と、その表はすものとの主要なる關係は「類似」といふ點である。勿論或形は同様の意味に於て崇高なる殿堂の壁畫として畫かれてある如き時には、私共にとつても亦或印象的な宗教的意味を之に附加して、非常に強烈なる感情を湧立たせることは出来る。けれども、これは聯想に依つて喚起された状態であつて、その根底としては、常に「類似」といふ判斷であるのであります。然るに未開人の考ではこの「類似」と

いふことは根本的要素ではなくて、この心に寫つた形と、その形の中に隠然包まれたところの「或神祕的の力」との関係がその根本である様に見へます

或デツサンが神聖物の上に置かれ又は彫られてあるとき、それは心象（イメージ）以上のものであり。或力がそれに加るのであつて、つまり彼等の考では、此、神聖なる空間とデツサン、とが合體して、融合して仕舞ふのであります。故にこれから見ると、彼等の考では、空間は極めて多様な、異なる性質を有つた、多數のものから成るのであつて、同種同質の空間は彼等の考には存在して居らない様であります。此著しき一例は中部オーストリアの種族に於ては、各社會團體はその占むるところの土地の或部分又はその近邊の土地と神祕的に結合せられて感ずる結果、その團體は他の團體の土地を占有することが出来るといふ様な考は毛頭彼等にはない。又他の團體が自分達の土地に住ひ得様とは決して考へない。土地と團體との間には神祕的な融合がなされるのであつて、その結果或地方は或種族なしにはその地方でなく、又或種族はその地方なしにはその種族でない。のであります。この種の例は限りなく見られるのであつて未開社會共通の現象として、物を抽象して考へることが極めて少いといふ實例であります。次に斯る社會の人々は又物を概括して考へることも極めて幼稚である。メキシコのフィシヨル族（Huichols）にとつては、小麥と牡鹿とヒクリ草（Pitc）神聖な植物）とは或意味に於て 唯一つであつて、同一のものであります。ヒクリは神聖なる植物であつて、非常に複雑した儀式に依て選ばれ、且つ準備せられたる人々が遠方迄、大なる困難と疲勞を意とせず毎年摘みに行くものである。此種族の存在及幸福とこの植

物の收獲とは神祕的に結合せられて居る、殊に小麥の收獲とこの植物の收獲とは非常に關聯して居て、若しこのヒクリの收獲が一定の儀式に依て營まれず、又はその收獲が絶無なるときは小麥は平生の如く生育せぬものとせられる。又牡鹿がそれと同様の神祕的性質を有てるもので一年中の或時季に牡鹿を狩することは全く宗教的行事の一端である。フィシヨルの幸福及その存続はこの時に殺される牡鹿の數に倚るものであつて、この點は全くヒクリの收獲と同様の關係であります。そして、各種の儀式に現はれたところから見るとこの「小表」が鹿であるといふことが考へられて居る様であつて、小麥を食しても、牡鹿を食しても又ヒクリを食しても、全く同じ結果を生ずるものと考へられて居る様である。故に此フィシヨルの集團認識即ちその強烈なる宗教認識に於ては、ヒクリも牡鹿も又小麥も共に非常に大切なる神祕的性質を伴ふものであつて、此點より見て同一物であると考へられる。即ち彼等の考は斯る集團認識の支配に依て左右され、私共の様に論理的思惟に依つて明かに區別された概念を持つて、それを分析し又は綜合することをなさないものであります、つまり神祕的性質に依つて互に結付けられたところの「集團的感情」があり。それに依つて彼等の考を支配する様な集團認識の組織が存するのであります。更に著しい例をとつて見ると或木は或階級に屬するもの又或階級の使用にのみ供せらるゝものと考へる。集團の中のメンバーと、自然物、動物、等とを凡て同種のものとしてその間に神祕的結合を認めることが多い。中部アフリカの「ヤオス」族(Yaous)では、「リソカ」(Lissaka)といふことは元來靈魂とか、影とか、又は精神といふ意味を有つて居るものであるがこれは同時に個性的であり且つ非個性的であることが出来る。又死して後はリソカは

ムルンガ(Murunga)となる。此ムルンガは二ツの意味を有つて居て一は「死者の靈魂」を示し、他は「一般に心靈の世界又は死者の靈魂の集合」を示す。又同時に此「ムルンガ」は「或事物に固有なる状態又は特性」を現すもので、丁度生命又は健康が肉體に固有なるものであるといふ様な關係を現はす。次には又此「ムルンガ」は凡ての神祕的なるものの活動原理であると考へる。土人は彼等に了解出来ないものを示すと常にそれはムルンガであると云ふ。即ち斯る集團認識に於ては一ケのもの、數ケのもの又特殊の性質等を示すに同じものを以て區別なく用ふるのであつて、未開人の心理では斯る混合は少しも疑はしいことではないのであります。

北米のインディアン、に於けるワカンダ(Wikanda)又はワカン(Wakan)は之と殆んど同様であつて、凡ての形(生のあるなしに拘らず)、凡ての現象は、「或共通生命」に依つて滲入せられて居るものである。又凡てこれ等のものは各意志の力及意識を有つものの如くに考へ。此神祕的の力を指して「ワカンダ」といふのである。これに依つて凡ての事物は人と結合され、事物同志結合し、又死者と生者、事物とその合計との間の連鎖が保たれる。この點についてはオーストレリアンのチュリンガ(Churinga)メラネシアンのマナ(Mana)ヒエロムン(Hieromun)のオランダ(Olanda)等は凡て同様である。つまり彼等の考では物を區別することが極めて曖昧であつて常に神祕的の力に依つて融合され、結合されて見出されるのであります。其他 數の觀念、言語等について見ても彼等の考では客觀的性質を有つことが極めて少くて、殆んど凡ての場合、具體的事物と融合し、且つ何等か神祕的性質を擔ふことが多い。例ば物を形容するには常に他の物を以てする。そして知覺したる其儘を具體

的に現はさんとするから、其言葉は非常に複雑して極めて多數の形容詞を有し、且つ時としては名詞と形容詞とが常に結合されて見出される。又物を數へるについては具體的のもの例ば指、腕、肩、其他體の各部分及近處にある物等を順次に數へる。而して又各未開社會には四とか、七とか、九とか其他多數の、或神祕的性質を含むところの數がある。

斯様な考を持つ未開社會の人々が日常の仕事、出來事について如何なる有様にあるかといふ點を見ますと。

狩獵についての彼等の考は極めて神祕的である、この第一要件として獲物の存在を確實にし又それを遠方から呼寄せるために或「魔術的行爲」がなされなくてはならない。これは大多數の未開社會に共通の事實であつて、この儀式は舞踏、念呪、斷食、等から成るのであります。「野牛の狩をする前にインディアンは野牛を呼ぶ爲めに踊る。五人乃至十五人位が一處に、頭には野牛の頭の皮又はそれに似た面を被つて、手に弓又は鎗を持つて踊る。この踊は野牛が捕へられて殺される迄のことを眞似たものであります。未開人の考には純粹な且單純な心象は存在せない、のであつて、心象は常にオリヂナルと融合しオリヂナルは又心象と融合して存在するものである、様に思はれる。これは名前と人、影と人、夢と實在とを分ち難いことが彼等の特徴であるといふ點より考へても左様考へられる。故に彼等にとつては、心象を所有することは、既に或方法に依りオリヂナルを所有することを保證するのである。

狩獵の第二要件は、獲物に對する「彼等の神祕的勢力」を保證することである。それは非常に長く且つ複雑し

たものであつて、カナダでは一週間斷食し、水を飲むことさへ許されない。且つこの間絶へず歌ひ續け、又多くの者が體の諸處の肉を切る。これ等のことは凡て、何處に狼が居るかを知らしむるところの精神を獲得するためである。出發の前に凡ての又は多數の者が同一地の狼について夢を見なければならぬ。次に彼等は沐浴して狩獵長に依つて與へられる宴會に出る、そこでは何物も食べずに、狩についての勇敢な話をし合ふ。更に狼の死靈に對する召喚をしてから、村の人々の喝采の中を顔及體を黒く塗て出發する。

又或社會では狩に行く前には性交を絶ち、或種の食物のみを食し、好い夢を見なければならぬ。又或處では狼を狩するには先づ狼より或訓令を自ら受けなくてはならぬものと考へる。尙又或處では此儀式の爲めに木を植へてこれを動物獲得の爲めの禮拜物とする。そしてこの木の根や、葉を彼の犬に食べさせる。或は又其他の方法で犬に種々の苦痛を加へ、又時としては獵者自身その體を蜂にささして自ら苦しむ。つまり、斯様な方法に依つて、彼等と、狩せられる獸との間に神祕的結合が取結はるゝものと確く信じて居るのである。斯る方法で彼等自身が狩のために準備されますと次には狩に便はれる道具が神祕的方法で特殊の術がかけられなくてはならない。例は西アフリカの或種族では狩に出る前に必ず銃の爲めに偶像を造てそこへ獵銃を供へることに依て的中を保證させる。

斯様に複雑な準備をなしたあと、狩に出て獸が見へたら早速打つて好いかと云ふと、未だそうはゆかない。その前にせなくてはならない色々のことがある。或種族では野牛の群が見へると、彼等の馬の話をするそして野牛

に詔ふ様なことを話し合ふ。又彼等の父母、叔父等の名前を呼ぶ。次いで野牛が近づいて来ると止まつて、煙管（パイプ）を持てる者がその成功に必要な儀式を初める。この者がパイプに火をつけて暫く頭を下げて動物の方に此パイプを向けて居る。次いで彼は煙草を吸ひ、その煙を野牛の方へ送り、地に向て送り、最後に四方の方角に送る。この儀式は明かに動物を、獵者と空間の方位との關係について神祕的結合をなさしめて、獲物の逃げ去ることを防ぐためである。

マレイ人についても同様のことが見られる、鹿が見へると或儀式を行ふ、この儀式をなさないと、その狩獵が不幸に終るものと考へる。其他多數の未開人の慣習には種々奇妙な方法で獲物を魔術にかけることが行はれる。オーストリアの一土人族では古來二句の歌があつてこれを歌ひ乍ら獲物を追ふと、それで動物が盲目になると堅く信じて居る。しかし此歌の文句の意味は誰にも分らない。

これ等の事實に依て見ると狩獵といふことも主として魔術行爲に支配されるものであつて、斯る術の魔力に依て獲物が獲られるや否やが定る様に考へるのであります。

獲物が捕へられると次に又新に魔術行爲が必要になる、先づその動物の靈魂の復讐を麻痺させるため又同時にその種類に屬する動物全體の復讐を麻痺させるため及びその捕へられた動物の死靈を慰めるため或儀式がなされる。動物は死して後でも尙ほ或意味で生存を續けて居て、その團體の生活に關與して居るものであり、且つ人間同様に再生するものであるから、彼等と平和的關係に居ることは極めて大切である。

チエロキー族 (Cherokees) は鹿を狩て歸るとき、彼等の後ろの道で火を焚いて鹿の長が彼等の家迄ついて來ることを防ぐ。又他の種族では狩て來た鹿をその足を東に向けて寝かし、色々の食物を供へて、その傍へ土人が順々に進んで行て頭から尾迄撫で、それに詔ふ様な風をし乍ら、能く捕へられて呉れたと感謝する。斯様な儀式をすると最早や何等復讐の心配は消失することゝなつて、次の狩獵をなすることが出来るものと考へる。

漁獵についても全く同様の儀式があり、戦闘をするについても同様である。出陣及凱旋の儀式、準備のダンス、斷食、節制、夢との相談、敵に對する召喚、祈禱、敵の力を弱めるための呪ひ、敵の死者よりの復讐を避けるための儀式、その死靈を慰めるためにする儀式等があつて、是等の「神祕的行爲」の如何に従て勝利と敗北の大勢が定まるのであります。

私共の考では斯様な神祕的な儀式と私共の希望してゐる結果を生せしむる行爲とを別々に分けたいでは考へられない。けれども未開人の考ではこれを分けて考へる様なことはないのであつて此神祕的な儀式と、實際生ずる結果とは全く分つことの出来ない連鎖につながれた一つの活動として確實に成立して居るのである。一方で凡ての活動は神祕的性質を持って居て、銃、網、獵者及戰者の馬等の凡ては儀式に依て造られる神祕的の力と融合して居り。他方では此儀式は狩獵又は戦闘等に欠くべからざる前提であるのみならず、それは既に狩獵又は戦闘の一部であります。つまりこれ等の活動の中には私共の考とは異た働きを有た或ものが作用して居るのであつて、是れが斯る社會に存する、固有なる集團認識の作用であると考へられます。

斯る神祕的な考が社會的及自然的秩序について如何に働いて居るかと考へて見ますと、少しく進歩した社會では神祕的儀式に依て、その希望する結果を保證するものは團體全員ではなくして、その團體の中で選ばれたる者である。この選ばれたる或者が造らんとする神祕的融合の仲介者として働くのである。この選擇についても勿論神祕的方法に依るのであるが或は自己暗示、に依り、夢に依り、又は出生に依ることもある。この出生に依る場合には、彼等にとつては祖先と、その新出生者とは同一であつて、再生である。酋長又は王が其初めに於て斯る仲介者であつたものと想像せられるのはこの爲めであつて、神祕的儀式にとつて唯一の資格ある人々である。この儀式に依て王は自然現象及團體の生活等を保證するものである。

バロンガ族 (Barongga) に於ては、その王國は極めて尊き神聖なる制度であつて、その王に對する尊敬は絶大であり、その命令は絶對的に服従せられる。又王の威信を保つところのものは、富又は權力ではなくして、丁度肉體が頭に依て生きる如くその國民はその王者に依て生きるところの「神祕的共生」である。

又或種族に於ては、王は雨及收穫を支配するものと考へられ、其他王と團體との神祕的結合を現すべき實例は限りなく見出される。即ち斯る社會に於ては、團體の幸福、團體の存在は完全に王者と融合し、その間に「神祕的共生」が完全に見られるのである。

次に未開人は病氣を以て目に見へざる、形なき或ものに依り造られるものであると考へる。ファイジアン (Fijians) には、病氣は液體 (外部的) の如きものであつて、それは病人の上に流れ來る又病人を所有するところの

作用である。この作用は神からも、悪魔からも、又生者からも來る、けれども自然的原因からは決して來ない。故に病氣は少しも自然的原因に依らないものであつて、彼等はその原因を目に見へぬ世界に求め、この見へぬ世界はこの世界と密着して存在するものである。之に反して私共の考では、この場合見へざる世界はこの世界に對して外部的であつて「自然界」と私共が名づくるところのものであります。未開人の考では、集團認識に依てこの二つの世界は全く融合して唯一つになつて存在して居るのであります。

病氣についての考が斯様であるから、從てその治療についての考も全然神祕的であつて治療者は「マジナイ人」でありその治療術は主として「マジナイ」であります。勿論少しく進歩した社會では病氣の起源について自然的原因をも少し宛認め初めて、その起源に依て神祕的原因に依るものと、自然的原因に依るものとの二つに分ち初める。

次に「死」に對する彼等の觀念を見ると、死は決して自然的出來事ではない。これは凡ての未開社會に共通の信仰である。この事は病氣を或靈魂の影響と考へる以上當然の考方であつて彼等にとつて「自然的死亡」といふことは決して考へられない。蛇に嚙まれて死ぬと、その蛇が魔術にかけられて居つたものと直ぐ考へる。これについて著しい一例を擧げて見れば、一土人の女が蛇に嚙まれて二十四時間後に死んだ。けれども土人はこれを偶然的出來事とは考へない。そしてその女が死ぬ前に一人の土人を指して、自分を殺した者は彼であると云つた。斯ることは彼等には少しも不思議ではない。

斯様な考の者にとつては「占ひ」が盛んに用ひられることは想像するに難くない。病氣の原因を知り、死亡の原因を認め、又犯罪人を探す等のことは凡てこの易斷の方法に依るのであります。夢が占ひに使はれることは凡ての未開社會に見られる。台灣の蕃族では夢に依つて種播の場所時季を判斷し且つ夢見悪しきものはこの日出て働かない。其他鳥の鳴聲、クシヤミ、等がその占ひの手段となり、この占ひの判斷に叛くことは丁度引力の法則に叛く様なものである。つまり彼等にとつて、此占ひは知覺の延長である、より正確に云へば知覺の豫見である。故に彼等の考では夢は知覺と同様の働きをなすものであります。

此占ひから魔術への推移は不識の間に行はれる。占ひは主としてこれ等の神祕的關係を發見せんとするものであつて、魔術はこれを利用せんとするものである。この二種のもは當然結合するものであつて、魔術行爲は、それを行ふためには神祕的關係を知る必要があり、又占ひが此關係を發見するのはこれを利用せんが爲めである。茲に述べました多數の實例、即ち狩獵、漁獵、戰鬪、病氣、死等に關する特殊なる彼等の考は凡て斯る社會に固有なる集團認識の作用に依るものであり、斯る集團認識に相當するところの信仰は凡て魔術性或は神祕性を具ふるものであるといふことが出來ます。

これ等の實例を考へ、又其他多數實見者の視察談を考へて見れば彼等が用ふる抽象及推理の手段は極めて薄弱であつて、知覺に依つて理解し得ぬことは凡て神祕的行爲であると考へて反省をなすことは無用のことと考へて居ることが分ります。

乍併これを以て直ちに彼等の無能力又は無氣力に歸してはならない。多數の實見者の談に依れば、彼等の精神は歐洲人のそれと殆んど同様に「科學」について有能であると云はれて居る。オーストリアン、メラネシアン等の子供は佛人、英人等の子供同様に傳道者の教ふことを習ふことが出来る。知的に全然魯鈍であるとか又は醒むることの出来ない、麻痺的な精神を有てるとか考へてはならない。彼等と雖もその熱望する目的を達せんとするときには實に透徹した、適切なる、巧妙なる優れたる性質を示すものであると云はれて居る。此點について或人は説明して云ふのに、彼等の精神は極めて少數の物に限られて働いて居るから、家畜、獵獸、魚等の生活に必要な事柄については非常に優れたる強い考へを持つて居るのであらう。といふ。然し若しそうであるならば、何故に斯る優れた考を、それ以上に擴大せないのであらうか。斯る説明即ち生活の必需品についてであるから強く感ずるので、その他のことは生活に直接關係がないから無關心であると云ふことは、完全な説明とはならない。凡ての人々の云ふ如く、未開人程強烈な信仰を有てて居る人間はない。それを變せしむることは殆んど不可能のことである。故に感覺に觸れるものゝみが彼等の精神に入るのであるとは決して考へられない。未開人は感覺に觸れぬところの「力」、靈魂等に對して實に抜くべからざる強き認識を有て居る。眼に見へざる精靈を見、又觸覺することの出來ぬ神祕の力を靈感することは、彼等にとつて極めて自然のことであつて、これ等のものと現實に存するものとの間に大なる差別を設けず却て眼に見ることの出来ない、體に觸れるゝことを得ない、「或もの」に、より強き實在性を附するものであります。この信仰は極めて強烈であつて、凡ての彼等の行爲に現はれ、その生

活はこれを以て常に鏤刻せられたるものであります。

故に未開人が推理を避けて論理的矛盾を悟らぬといふことは、彼等の感官に觸るゝところのものを超ゆるだけの力を彼等が具へて居らぬためであるとは云ふことが出来ない。又同時に彼等が全然小數の物質的對象にのみその精神を奪はれて居つて、そこに固着して居るためであるといふことは決して正當でない。この原因はその他にこれを探し求めなくてはならない。彼等の考が若し、私共のその如く働くものとしたならばその受けたる刺戟に對して、私共同様の反響が現はれなくてはならない。然るに彼等は反省もせず、推理もしない。この相違はもしこれを彼等の怠惰、無氣力、又は無能力に歸することが正當でないとすれば何處に求むべきでありますか。

この點が私共にとつて最も重大なる問題であります。斯様な考を有てる未開人の論理は私共の論理とは異つたものでありませうか。私共の論理を支配するところの矛盾律は彼等に何等の支配をなさないものでありませうか。

兎に角觀察に依て明かなるところは、彼等のこの考は私共の云ふ所謂個々の經驗に依ては動し得ないといふ點であります。彼等の考を支配して居る集團的信仰は彼等の精神生活の殆んど全部を占むるものであつて、個々の實踐的經驗はそれに對して全く無能力である如く見ゆるのであります。乍併多數の未開社會を比較觀察して見れば明かなる如く、その未開程度の失はるゝに従て、この特殊なる考は徐々に薄くなり、私共の有する論理的思惟に相當すべき働きが漸次に現はれて居ることは事實である。故に彼等のこの特殊なる考と私共の有つ論理とは繼續的進化の連鎖に依つて結はれたるものであつて、越ゆべき一溝渠がその間に横はつて居様とは思はれない。果

して然らば未開社會に行はるゝ認識のカテゴリーと吾々社會が現在有する認識のカテゴリーとは如何なる關係に立つものであらうか。云ふ迄もなく未開人の時間、空間、因果の觀念は私共のそれに比して極めて特殊なるものである。彼等にとつて、時間及空間は極めて濃厚なる質性 (Quality) を伴ふて居る。ユーバートの云へる如く、「彼等は時間の質性に從て、時間の感情を有するのであつて、これを客觀的性質に依つて認識せない」ものである例へば或土人は時間を「幸せの時」と「不幸せの時」といふ様に分ち或時の間「幸せの時」が續くと次に或時の間「不幸せの時」が來る、そして不幸せの時になると彼等は仕事を止め、戦闘を中止する。空間についても同様であつて、オーストレリア及北米インディアンの或社會では空間は膨大なる圓周である。何となればそのキャムプ (Camp) が丸いからであるといふ。又空間の圓周は種族の集合、及その集合についての心象と同様に分割されて居つて、その種族の中にある氏族 (Tribe) の數丈けに土地が分割される。この土地の分類はその氏族に依つて占められし場所に依て定まり且つ各土地は氏族が名づけられたる「トテム」に依り確定せられる。そしてこの基礎的氏族の數が變化すれば、それと同時に、空間の土地の數も亦變化する。斯くして「社會組織」は「空間組織」のモデルであり、實體と影の如き關係に居る。因果律について見ても、全じく極めて神祕的なものであつて、常に魔術的勢力の影響と結合して居る。私共にとつて原因と結果は常に時間と又殆んど常に空間とに與へられてあるのに、未開人はこの二ケのものゝ内一のみを知覺し、他は眼に見へぬ、知覺し得ぬ或ものゝ合計に屬すると考へる。彼等にとつて此「不知覺の世界」は他の「知覺界」同様に現實である。即ち原因と結果の何れか一は不

知覺の世界にあるのであるから「超空間的」であるといふことが出来る、又或意味に於て「超時間的」である。しかもこの兩者は強い連鎖の下にあるのであつて、例へば生きてる者に斯く斯くの苦しみを與へることを定むるものは新に死した者に依て發せられたる怒りである。故に或意味に於て、未開人の精神に於ける經驗の世界は私共のそれよりは極めて豊富であり且つ廣大であるといふことが出来る。

以上説明したる如き未開人の精神が斯る社會に固有なる集團認識の作用に依る結果であることは明かである。即ち斯る考へは原始的意味に於ける宗教認識に依つて常に支配せられて居るのである。彼等の生理的機能も私共の生理的機能も決して異なるものとは考へられない。しかも彼等の感覺及心象に上る現象は私共のそれとは同様でない。常に神祕的であり融合的である。この神祕的且融合的性質は彼等の社會制度の根底である。斯る神祕的なる集團認識と現在私共の社會に於ける集團認識とは如何なる關係に立つものであらうか。そして又私共の論理的思惟のカテゴリ―とは如何なる關係に立つものであらうか。

茲に於て私はデューケイム教授の提唱にかゝる大なる疑問、即私共の認識のカテゴリ―は社會即集團の所産ではないか。といふ點に想ひ到るのであります。果して如何なる程度迄此解釋が正しいか。又それが如何なる程度迄先驗主義、及經驗主義の論争に對して解決の援助を與ふべきかは茲で輕々に斷ずることを得ない。然しこの問題に對して少くとも一道の光明を投ずるものであることを私は信するものであります。(以上講演)

(一) 神秘的共生感の解體と精神の個性化的傾向の發達

未開社會に於ける集團認識は全く神秘的且つ融合的であつて、文明社會のそれとは非常に異なるものなることは上述の説明に依て明かになされたと考へる。吾々の知る最も未開なる社會に於ては、そのメンバーの精神活動は殆んど全部斯る神秘的なる集團認識の支配を受け、その意識内容も亦この集團意識以外に主要なるものを包含せざるものである。而してその集團認識は全然融合關係の特性を有ちそのメンバーの心理も亦同様の性質を有つて居る。

斯る直接的なる融合關係の支配を受けるところの認識は實は吾々の云ふ純粹なる認識活動とは幾分その特性を異するのであつて、そこには吾々の認識活動に見る如き、認識主觀と對象の明瞭なる對立は存在せぬ。吾々が認識と云ふとき、假令それが直覺的なる場合であつても主觀と對象の對立及その統一とを豫想するものである。然るに融合關係に依る認識は斯くの如き對立と統一とを明かに認め難き状態にあつて、主觀は對象に融合して存在し、この兩者は完全なる共生關係を形成するのである。即ち斯る社會の人々のマンタリターの作用は主觀は對象を所有し、又對象は主觀を所有して、それに依て相互に生きるところの共生である。故に斯る社會に於ける認識はレビュー、ブリュール教授の云た様に、集團認識と云ふよりは寧ろ *Intensiv emotionelle* の集團的精神状態と云ふ方が適切であるかも知れない。即ち認識は未だ團體の結合を有效ならしむるところの心的狀況から分

化せられない状態にあるのであつて、斯る社會に於ては未だそのメンバーの精神は個性化せられず、その個人意識は集團意識と極めて密接なる關係に立ち、未だ集團意識より明かに分離せず、全然これの下に統一せられて存在するのである。然るに社會に於けるメンバーの集合關係の變遷即ちその數の變化及結合關係の進化等に應じて、その集團意識の活動も亦變化をなすに至た。即ち制度の分化、組織の複雑を加へ、これに應じて又メンバーの精神活動も亦分化し、複雑化することとなり、その結果として、個人は「彼自身」(Himself)に就て幾分明かなる意識を有つ様に傾いて來た。これより初めて彼等が屬する場所に感ぜるところの團體から徐々に自分を引離して考へる様になつた。又これに依て初めて外界の事物が或神祕性を有するものの如くに實感し初めたのである。初め彼等のマンタリテーは「個人と團體」及「團體と周圍の事物」等について共に感じ且つ共に生きるところの融合關係を表はして居たところが、その個人意識が徐々に強くなるに従て、團體と個人及その他の周圍の事物との間に於ける神祕的共生の感情は漸次に薄弱となり、より少く直接的に、より少く固定的に感ぜられる様になり。以前よりは多少明かなる連鎖がそれに入れ代て認められるに至るのである。即ち一言に云へば「融合關係自身」が認識の對象となる様に傾くのであつて、例ば個人意識が自己を *Communité* として認め、次いで、周圍の事物の内から、自己を引離して考へる様になると、これに依て團體の認識も亦影響を受け、團體内の多數個人を統一し、又次いで異なる多數團體を統一するところの認識も亦新なる形式に依て決定せられるに至るのである。

る。即ちこの結果として従來見られざりしところの、融合關係の仲介手段の出現を見るのであつて、この仲介手段の助けに依て従來の融合關係が認識活動として猶ほ維持せられるに至るのである。

例ば Bororo¹ は最早彼等自身 Arraras (一種の鳥)であるとは云はないで、彼等の祖先は Arraras であつた、そして又彼等の死後は Arraras になると云ふ様になる。 Bororo 及其他同様に下級タイプの未開社會に比して少しく開化せる未開社會例ば Inichols, Zunis, Maoris 等の社會に於ては、上述の集團認識の進化は一層明かに認められるのであつて、仲介手段として見らるべき多數の表徴を含有することが見られる。即ち前者の社會に於ては猶ほ神祕的共生の感情は未だ極めて強烈に維持せられて居るけれども、後者の社會に於ては融合の欲求は同様に強烈であつてもこの融合は最早各メムバーに依て直接には感ぜられないで、宗教的行爲又は魔術的行爲等と結合せられ、神聖なるものとの交通、僧侶及祕密社會のメムバーに依てなされる儀式、及神話等の利用に依てそれが達せられるのである。

此融合關係の仲介手段は、非常に異なる多數の種類のものより成るのであつて、大多數の社會に於て、ポリネシアンの「マナ」のその如き漠然たる認識を見ると同時に、それよりは幾分個性化せられたところの精神についての集團認識及び靈魂、動物、人間、半人間、英雄、及神等に就ての多少明瞭なる形に於ける神祕的對象の集團認識を見ることを得る。例ば Arunta は彼が Iniméne であると同時に tel ancêtre であると感じるのであつて、斯る社會には未だ祖先崇拜教は存在せなす。又 Bororo は Bororo であるところの Arraras を宗教的崇

拜の對象とはなさない。然るに少しく進んだ社會に於ては初めて、祖先崇拜即ち英雄、神、神聖物、等に對する崇拜が見出されるのであつて、初め神祕的共生感及それを保證するための儀式に依て實現されて居たところの融合關係は、次いで崇拜の對象を作り出し、宗教的信仰を形成して、これより吾々の云ふ純粹の宗教認識の發現を見たるものの如くである。而してこれ等對象の個性に就ては無數の程度が存するものであつて、一ヶであるか數ヶであるかを見分けることも出来ない様な「神祕的力」から、その肉體的、道德的特性に依て明かに定義せられたところの神に至る迄限りなき程度が見られる。この對象の個性は主として、その社會の進歩の程度に應ずるものであつて、それが彼等の精神的タイプであると同時に又彼等の社會制度のタイプである。

此點より考へて、神話についても亦同様のことが考へられる様に思はれる。個人と社會團體との融合關係が猶ほ直接に感受せられて居る間即ちそこに神祕的共生が現實に存する時代、(オーストリアン、北米インディアン等)が續いて居る間は神話は稀に見られるのであつて、極めて貧弱なるものであるけれども、これより少しく進化せる社會(Zanis, Troquois, Polynesians, 等)に於ては、之に反して、神話の發達が極めて著しい様に思はれる。故に神話も亦未開人のマンタリテーが直接的に感受せぬところの融合關係を仲介手段に依て新なる形式に於て實現せんとする力の發現と見て可なるものの如くである。

(二) 純概念的傾向の發達

團體内に於て重要であつたところの融合關係が仲介手段を通して保證せられる様になりそれが直接的に感受せられなくなると、二ケの大變化が人々のマンタリテーの上に導かれることとなる。即ち若し或種族内に於て特定の家族又は個人が季節の支配者となり、雨の統制者となり、又其他その種族の生活が依據するところの一般現象の支配者として認めらるゝ様になると、斯る關係に就ての集團認識は益神祕的なるものとなつて、これにその神祕的特性が集中せられることとなり、その結果この神祕的融合關係自身が認識の對象となるのである。

又これと反對に團體内の他の家族他の個人及この集中された神祕的融合關係に關係なき他の事物は以前よりはその神祕性を失ひ、その結果、より冷靜に、より無關心に認識せられ、從てより客觀的に認識される様になる。即ち次第に明瞭な確定的分類作用が一方に於ては認識主觀と神聖物との間に確立し、又他方に於ては認識主觀と非神聖物との間に漸次に確立するのである。この結果として或ものは根本的に神聖であり、且つ常に融合關係に必要なる仲介手段であり、又或ものは之と反對にその神祕性を徐々に消失するところの傾向を發生するのである。これ等の結合より更に二ケの重要な結果を生ずる。

第一、に團體がその生活のミリユーとして包括するところの人及物の凡てが以前の如くその團體と直接に神祕的融合關係を保持せぬ様になれる結果、斯る融合關係に依て表示せられたところの原始的な分類作用は徐々にその神祕性を失ひ舊團體の支配を脱して新なる基礎に倚るところの新分類作用が發生するのである。勿論動物、植物星等の認識は猶ほ神祕性を伴ふては居るけれども、斯る神祕性がものに依て不同的の強さを有つ様になり、或も

のは非常に神祕的であり、他のものは極めて僅か神祕的であるといふ様に變化する。この新に生じた認識上の差異は自然新なる分類作用を導くのであつて、神祕性の結晶として且つ仲介手段として認識せられたところのものは、他のものより分離せられるのである。即ち仲介手段たらず、從て團體の *intel et supreme* に關係せぬところのものはこの神祕性を失ふと同時に、その客觀性を増加し、前者とは異なる觀點より分類が始められる様になる。換言すればこれ等後者のものは吾々が「概念」と呼ぶところの形式に、接近して來るのである。

第二、に斯くの如き新なる分類が始まると同時にこれ等對象の知覺作用も亦徐々にその神祕性を失ふ様になる。吾々が客觀的特性と呼ぶところのものは、未開人のマンタリテーにては一の複合體の中に他の多數のものと一處に、結合して見出されるのであつて、未開人の注意はこの複合體全體にのみ集中せられる。然るに此複合體が漸次に貧弱となり、神祕的要素を失ふに至ると、自然の結果として、客觀的特性にその注意が惹かれる様になつて來る。即ち純粹知覺の部分が、神祕的な集團認識の部分が減退することに比例して増加するのである。

斯くの如くして、融合關係が非直接的に感受せられる様になるに從て吾々が今日純粹認識と呼ぶところのものに接近するのであつて、*“intellectual et cognitif”* の要素が次第に大なる部分を占むる様になり、その初め *“émotionnel et moteur”* の要素に包括せられて居たものが、これより離脱する様に傾き、分化するに至るのである。極めて未開なる社會に於ては「經驗」に依て、そのメンバーのマンタリテーは不可變であるといふことは既に説いた。即ち集團認識の權力及その特殊なる結合關係の權力は絶大であつて極めて明瞭なる感覺的證明を以

てしても之に反抗することを得ない。然るに知覺がより少く神祕的となり、又その結合關係が前同様に強大なる力を以て個人に臨まぬ様になると周囲の事物は新なる眼を以て觀察せられ、この進化せる集團認識は經驗の影響を少し宛實感し初むるに至るのである。即ち融合關係の感情が最も弱められたる部分は神祕的結合關係が最も早く減退する部分であつてその認識に於て、客觀的關係が第一に進入するところも亦この融合的感情の最も弱き處より始まるのである。

斯くの如くして未開タイプの社會のマンタリテは經驗に依て影響可能になると同時に又矛盾に對して能感になつて來る。前にはこの矛盾に對して殆んど全く無關心であつて、吾々の眼に全然予盾であると見へるところのものを肯定するに就て少しも困難を感じなかつた。例ば一人の人間は彼自身であると同時に他人であり、彼は一の關係にあると同時に他の關係にあり 又彼は個人であると同時に集團である。未開人は斯る肯定を以て満足して居た。何となればこの方が彼等にとつて眞理を理解するに就てより適合して感ぜられたからである。然るにその集團認識に於ける神祕的共生感情が減退するに従て、吾々の云ふ論理的矛盾が感ぜられる様になり始めたのである。そして徐々に中間物即ち仲介手段が融合關係の間に導かるゝ様になり、この仲介手段の發現に依て斯る論理的困難を種々なる方法に依て解決するところの新たな集團認識の活動が見られるに至るのである。此點に就て更に詳しく説明すれば、未開人の心理は、吾々の云ふ矛盾の論理的原則に反する如くに見へて、論理的に不合理なるものの如き觀があるけれども斯る不合理は 從來單に感ぜられて居た融合關係が明かに表示せられたる肯

定形式の下に出現する様になつて、初めて少し宛實感せられるに至るものである。即ち、融合的感情がその密度を失ふときに初めてこれに反する或ものがそこに生ずるのである。

又集團認識が現象間に造た特殊なる *Tauson* は、それが、これ等現象に就ての確定的概念と一致せざることに依てのみ、不合理なるものである。しかも斯る確定概念は彼等のマンタリテーが第一に働くところのものではない。經驗の教訓に對して、より注意深くなり又吾々が客觀的と呼ぶところの特性が集團認識に於ける神祕的要素よりは重要なものとなる時、初めて現象間の相互關係が不可能又は不合理として拒否せられ得るのである。

眞の未開社會では、人は岩から生れることが出来る。石が話すことが出来る。死者が生者であることが出来る。女が蛇や鱈を生むことが出来る。其他多數の同様に不思議なことが當然肯定せられる。人間が下等動物を生むといふことは自然の法則と一致せぬ様に吾々には考へられる。乍併人間社會團體と鱈社會團體との間に直接的結合が確信せられる未開社會に在ては、これは少しも疑はしいことではない。同様にして屍體即ち化學的にその組織が生命に對して不適當になされたものが、再生するといふことは自然の法則とは一致せぬに拘らず、文明人精神の多數はラザレの復活を無條件に容認する。これは神の子についての彼等の認識はその子が奇蹟をなすべき權能を有つといふことに依て十分に解決せられる。然るに凡てのものについて斯る奇蹟を認めることが未開人の心理の特徴であつたのである。斯る未開人の心理作用も一見して感ずる如く全く人爲的なるものではなくして、吾々が客觀的と呼ぶ關係に就ては全く無關心であるけれども、他方融合關係に就て絶へず強烈なる注意を傾注するの

である。主觀と對象間の他の關係、即ち想像的又は事實的關係を彼等に暗示すると彼等は之を避けて誤りであるとして、又無意味なるものとして拒否する。即ち彼等にとつての所謂「經驗」は全く特殊なる性質のものであつて、全然神祕的なるものである。斯る心理の續く限り純粹經驗はこれに對して何等の力をも及ぼすことを得ないのである。故に未開人が物理的不能に對して服従せぬ理由は又主として斯る融合關係の下に神祕的結合關係が存在するに依るのである。

乍併或社會に於てそのマンタリテーが制度と共に進化し、且つ神祕的結合關係が徐々に薄弱となり、それが個人に君臨する力の弱くなるに從て、主觀及對象間の他の關係が知覺せられ認識は一般的及抽象的概念の方向へ進み、又全時に物理的可能又は不能なるところのものに就ての感情及觀念等が正確になるのである。

即ち集團認識が概念的形式に傾くに從て、斯る變化が生ずるので、一方に於て斯る形式の下に現はされる融合關係は前述の如く、矛盾を避くるため自ら變化をなしつゝ初めて維持せられることが出来るし、又他方に於ては主觀と對象との確定的概念が十分形成せられたる時に於てのみ或神祕的結合關係の不合理が感ぜられるのである。「石」の根本的特性が「石」といふ概念に定着せられ、又この石がそれと全様に確定的なる性質を有つた石以外の自然の概念の間に包括せられるとき初めて、石が話し、意志に依て動き又それが人間を造ることが考へられなげになるのである。概念が確定し、分類せられ、且つ整理せられるに從つて、これ等の關係を無視するところの肯定が矛盾になるのである。斯くの如くして精神の論理的要求は集團認識の神祕的結合關係が解體し初むるこ

とに依て確定せられ、且つこの確定と共にその論理的要求が増加するのである。

(三) 集團認識の進化

集團認識は以上説きたるが如き過程に従て徐々に進化をなし、未開社會に固有なる神秘性强き集團認識の減退を見るものである。然しこの進化は必然的なものでもなく、又文明社會に於ては全然斯る神秘性の消滅を見るものでもない。

概念は常にそれに先立てる社會の集團認識の結晶であり、經驗が解決し得べき結合關係の外は依然として斯る神秘性の形跡を永久に残すものである。吾々社會の集團認識は未開社會のそれに比して斯る神秘的要素は極めて微弱であり、純論理的要素の極めて有力なることは何人も認むるところである。乍併猶ほ集團關係に關する事象の大多數は決して純粹經驗に依て全く解決し得べきものではない。自然科学と社會科學との限界は主として斯る相違に基くものである。概念の確定は融合關係を主とする集團認識に於ては見ることを得なかつたところの或力を精神の論理的活動に供するにしても、その活動の作用は凡ての事象に就て全様に有力、有用なるを得ないものである。云ふ迄もなく、從來の集團認識とは異なる或ものが成立することは明かであるにしても、新に生ずべき變化は、凡てのものを通して全程度に全様の變化を導くものではない。經驗に依て滲入可能となつた集團認識は經驗の及ぶ範圍の大にして且つ完全なるものに就ては、最も自由に、最も極端迄その變化が導かれる、けれども斯る

範圍の小にして、不完全なるに從てその變化は左程に顯著なることを得ない。前者の例は自然科學に見られ、後者の例は社會科學及哲學に見られる。試みに靈魂、生命、死、社會、秩序、血族關係、及美、等についての概念を分析して見れば直ちにこの關係は認められる。そして未開社會に共通な或神祕的融合關係より導かれたる多數の要素が依然として吾々社會の中にも見出されることが分る。又假りに大多數の概念より斯る神祕的要素の完全なる排除が出来るものと想像して見ても猶ほ人間の精神作用からこれを全部除去することは困難である。純粹概念及其の合理的組織に依つて實現せられんと傾くところの論理的思惟は未開社會の認識に現はれしところの、マタリテーと全じ廣さをもつものではない。この後者は決して純知的機能及其のシステムよりのみ成るものではなくして、極めて複雑なる渾一體をなし、この中に於て、知識は“*Elements noteurs*”殊に“*Elements émotives*”と融合せられて存するのである。故に知識的機能が社會の進化に從て、此渾一體より分化せんと傾き、他の要素より分離せんと傾くときは、これに依て一種の獨立は護得するけれども、それは決して排除せられたる他の要素と全様のものを全部提供するものではない。されば、これ等他の要素は、永久に斯る知識的機能の外に、それと相並んで精神的要素として殘存するのである。

云ふ迄もなく論理的要求が強くなり、それが慣習的になればなる程、この論理的思惟が證明することが出来る様な矛盾に無關心であることは少くなる。この意味に於ては、論理的思惟が發達すれば發達する程、融合關係に依て形成せられ、論理的矛盾を含むところの集團認識は次第に排除せられることは明かである、乍併論理的思惟

は未開社會に見る如き特殊なる、マンタリテーの普遍的後繼者たるを得ない。斯る論理的思惟の外に猶ほ強烈に感ぜられるところの他の或ものが常に存在するのであつて、これに就ては未開社會の神祕性は依然有力に残存するものである。故に論理的矛盾の存すること明瞭なる場合に於ても猶ほ非合理的なる認識は維持せられ、融合的なる内部的感情其儘を以て完全に満足することもあり。或は又斯る感情の上に論理的要求の力に依つて多少の更正が加へられ、變形せられて存在を續けることもある。これが吾々の知る凡ての社會に於て大多數の制度が依據するところの集團認識である。

これ等集團認識の永久的存在及其その證據としての各社會の人間のマンタリテーは、如何に論理的思惟が進歩したる社會に於ても、その最も完成せられたる知識より受くる満足は（純抽象的なものを除いて）猶ほ常に不完全に存する理由ともなるのである。無知に比すれば、知識はその對象のより強き所有であることは明かであるけれども、未開社會のマンタリテーが實現するところの融合關係に比すれば、斯る所有は猶ほ常に不完全で、不十分で、外部的なるものである。知ることには一般に客觀化することである。客觀化することは知らんとするところのものを *hors de soi* に投げ出すことである。然るに未開社會のマンタリテーを支配する集團認識は相互に融合するところの主觀と對象に極めて密接なる共存を保證する。融合の眞髓は凡てのものがそこに合一、融合することである。斯る集團認識と論理的思惟との關係を理解せんためには唯だ「神」といふ對象に就て考へて見れば十分である。神を知るための合理的努力は主觀が神と融合すると同時に又それより隔離せんとするものの如くに見ゆる。

論理的要求に一致することの必要は人と神との間の融合關係即ち論理的矛盾なしには認識することを得ぬところの融合關係に一種の反抗を感じしむる様に思はれる。乍併神と統一されて感ずるところの強き信仰者にとつては斯る合理的知識の必要はこの場合殆んど感ぜられず、その主觀と神との融合より生ずる意識が供すところの情熱燃ゆるが如き信仰の確實性は論理的思惟に依て得られる蒼白なる、冷かなるそれよりは數層の必要を有つものである。斯くの如くして對象の完全所有の經驗は、知的活動を起源とするところのものよりはより深刻であり、直覺に依り、相互抱擁に依り、主觀と對象との相互所有に依り、即ち完全なる融合に依り陶醉の境地に到達せしむるのである。これは勿論、論理的形式に従ふところの知識が到底達し得ぬところの境地であり、且つ吾々文明社會に於ても斯る精神的欲求は依然として存在し、論理的思惟に比し、猶ほ一層命令的勢力を以て個人に臨むところのものである。

一方で個人の論理的要求は凡て認識せられんとするものに君臨せんとすると同時に、又他方では、社會團體の集團認識は假令それが純然たる非合理的且つ神祕なる場合であつても、これ等の集團認識がその表現であり、又他の意味に於てその根底であるところの社會制度（宗教、道德、法律、政治等）として永に存在するものである。此の二つの傾向は惹いて個人と社會の根本問題に觸れ、又思想の自由、新舊信仰の衝突及宗教と科學との争ひ等に關聯すること大であり、現今吾々社會に現實に存する多くの思想上の鬭争も何等かの意味に於て此點に關聯せぬものはないのである。

追記

本文の前半は大正十一年十二月十四日第十六回社會政策學會大會に於ける講演の拙稿であり、後半はこれに對する補完である。

論中の材料及構想は主として次の諸名著に依るものである。(十二、一、十)

Levy-Bruhl—Les *notions mentales dans les Sociétés inférieures*. 2. e. ed. 1918. Paris.

Levy-Bruhl—*La mentalité primitive*. 1922. Paris.

Émile Durkheim—*Les formes élémentaires de la vie religieuse*. 1909. Paris.

H. Hubert et M. Mauss—*Mélanges d'histoire des religions*. 1909. Paris

C. Bouglé—*Essais sur le régime des castes* 1908. Paris.

C. Bouglé—*Leçons de sociologie sur l'évolution des valeurs* 1922. Paris.

高瀬 莊太郎